



平成16年 新進舞踊家競演会(サンケイホール)

# 「咲くやこの花賞」受賞を力に、 上方舞を未来につなぐ

昼間は作業服を着て、祖父の代から続く電気屋を手伝う。そして夜は着物に着替え、上方舞のけいこに励む。こんな2つの顔を持つのは、大阪文化の担い手に贈られる「咲くやこの花賞」(演劇・舞踊部門)を受賞した、山村流師範・山村若隼紀さん(31)である。18歳で初めて出会った流麗な舞の世界に魅せられて以来、山村若佐紀門人の貴重な女形として活躍する。

## 舞との偶然の出会い

上方舞は江戸時代後半に上方で生まれた日本舞踊の1つ。「座敷舞」「地唄舞」とも呼ばれ、能を基本に歌舞伎や人形浄瑠璃の要素を取り入れた静的な女舞が本流である。中でも最も古い流儀である山村流は、歌舞伎役者・山村友五郎によって1806年に大阪で誕生した。

狭い座敷で埃を立てないように静かに舞うため、女性の習い事としても親しまれた。谷崎潤一郎の小説『細雪』の中で主人公・妙子が舞う地唄「雪」も山村流で、それにあこがれて始める人も多いという。

そんな世界に、高校3年生の男子が足を踏み入れたのは全くの偶然だった。「バレエをしている友達に影響を受けて、身体で表現することに興味を持った。教育委員会文化振興課(当時)を訪ねて情報を集め、たまたま見つけたのが上方舞教室の案内だった」。

## 自己表現の新たな手段

上方舞や山村流について何の知識もない状態で通い始めたものの、若佐紀師匠の指導の下でその奥深い世界に目覚める。「身体が硬く、まるでロボットのような感じだったが、大変楽しかった」。早々に本腰を入れ、師匠の自宅に稽古に通うようになった。

並行して、大学では美術を学んでいた。「絵を描くことが小さいころから最も身近な自己表現方法だった」からだ。しかし、舞によって新たな手段を得た。「体を使って感情を直接表現でき、

続ければ続けるほど自分のものになる。消費されるものではなく蓄積されるものであることに強く魅力を感じた」。絵筆を扇子に持ち代えた。

家業の後継者としての期待も背負いながら、夜や週末を舞の時間にあてて両立している。忙しい日々だが、「舞をやめたいと思ったことは一度もない」という。「家業のためにやめた方がいいのかなと思ったことは何度もある。でも舞がなければ自分ではない」。

## 師匠の背中見て芸磨く

168cm、56kg。男性としては華奢で小柄だが、やはり女性よりもより女性らしい立居振舞を要する。「師匠は女性になりきれというが、まだまだ修行不足。心の中に溶け込ませて舞うために、歌の内容を解説したり、縁のある土地に出向いて空気を感じたり」。1曲に半年ほどかけて、じっくり取り組んでいく。

師匠の舞台には「同じ人間なのに何でこんなに違うんやろ」と畏敬の眼差しを向ける。「屏風とろうそくがあるだけなのに、師匠が舞うと情景が映像のようにばあっと見えてくる。万葉集の景色や風情を体験したような不思議な心地になる。本当にすごい」。

25歳で名取・師範となり、大きな舞台にも立つが、「まだ足元にも及ばない」と謙遜する。後進の育成に力を入れるなか、思いがけず届いたのが平成19年度「咲くやこの花賞」の受賞の知らせだった。師匠には「30代のうちにもらえたらいいね」と言われていたという1つの目標を達成した。

受賞を励みに、そして“上方舞の貴重な若手のホープ”という期待を背負って、誓う。「今回の受賞は山村流六世宗家若師匠と若佐紀師匠のおかげです。200年の歴史を持つ山村流のさらなる継承と発展に向け、少しでも力になれる舞踊家になっていきたい」。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

## プロフィール

山村流師範

やまむらわかはやき

山村若隼紀さん



1976年、大阪生まれ。本名・波田野勝久。95年山村若佐紀門下入門、99年大学美術学部デザイン学科卒業。2001年に名取・師範免状取得、山村若隼紀となる。03年に第40回産経新聞社主催なわ芸術祭で「新人賞」、「大阪府知事賞」、「大阪市長賞」を受賞。主な舞台歴は「山村流若佐紀舞の会」、「山村流若佐紀夏の会」、「山村流舞扇会」、「新進舞踊家競演会」など。今年1月に生徒たちの発表会を兼ねた「第1回隼紀会」を開催。2月16日に大阪市より「咲くやこの花賞」受賞。

## 【山村若隼紀上方舞教室】

阿倍野市民学習センターでも開講。

詳細はホームページ参照。

<http://www.wakahayaki.com/>